

全ては思い描く一枚のため 一途に挑み続ける

雷鳥を愛し、ありのままを
表現する雷鳥写真家

高橋 広平 さん



それからは雷鳥に会うために時間のある限り山へ出かけるようになりまし
た。「また会いたい」という思いが日に日に強くなり、勤めていた会社を辞め、山小屋へ転職。雷鳥写真家として独立するまで9年間働きまし
た。山小屋では食事作りから施設の修

人生を変えた一瞥
幼い頃はおとなしい性格で絵を描くことが好きでした。出身地の北海道苫小牧市は多くの工場が集まる工業が盛んな地域。フェンス越しに見える工場の絵をよく描いていました。登山を始めたのは会社員だった20代後半、友人の誘いがきっかけです。山に登り始めて1年経った頃、夏の北アルプスで人生を変える出会いがありました。何かの気配を感じて足元に視線を向けると、目に入ってきたのは今まで見たことがないとてもかわいい生き物。急いで写真を撮って調べると、雷鳥だと分かりました。

長い時間を共にし、撮影してきたことで雷鳥の見た目や表情、性格の違いを見分けられるようになりました。雷鳥も人間と同じように、リラックスしていることもあれば、機嫌を損ねていることもあります。他の条件がそろっていても主役の雷鳥が良い表情をして

理、登山道の整備に至るまで、体当たりで仕事に励みました。雷鳥を記録するために写真を撮り始めたのもこの頃です。独学で始めましたが、構図の取り方など幼い頃に絵を描いていた経験が思いがけず役に立ちました。忙しい日々でしたが、間近で雷鳥を見て習性を学び、撮影する技術を磨くことができたのは貴重な時間でした。

浮かぶイメージ研ぎ澄ます

私は撮りたい写真が絵コンテのように次々と頭に浮かんでくるので、そのイメージと同じ状況を現実に見出し、撮影をしています。積み重ねてきた知識と感覚を研ぎ澄まし、雷鳥の動きや撮影場所、天候などの条件を予測し全てがぴったりに合う状況でシャッターを切ります。自然が相手なので、うまくいかないこともしばしば。中には7年かけてやっと思い描く一枚が撮れたこともあります。自分のイメージ通りに写真が撮れた時に込み上げるうれしさは格別です。



1977年北海道苫小牧市生まれ。山小屋で働きながら独学で写真を撮り始め、2017年に雷鳥写真家として独立。「雷鳥とその生態系」をテーマに、全国各地で写真展を開くなど精力的に活動している。



◀高橋さん Instagram

野菜が変身！ 絶品スイーツずらり

10月9日・10日 やさいスイーツフェア合同販売イベント



市内の菓子店や飲食店が安曇野産の野菜を使った新作スイーツを期間限定で販売する安曇野やさいスイーツフェア。参加店舗のスイーツが一堂に集まり販売するイベントが市役所で開かれました。本年は「それぞれの店舗が考える安曇野」をテーマに12店舗が参加。当日は13種類のスイーツが並び、販売前から多くの人々が列を作りました。ワサビを使ったスイーツをイトインスペースで味わった北村京子さん(63・豊科)は「甘さの中にもピリッとした味わいがある。期間限定のおいしさを味わえて満足」と舌鼓を打っていました。スイーツは10月31日まで各店舗で販売します。

アートがつなぐ 誰もが暮らしやすい社会

10月4日・5日 共生社会×文化芸術フェスタ

アートやさまざまな国の文化を通じて共生社会を考えるイベントが碌山公園で開かれました。4日の「まんまるカラフルまつり」には多くの家族連れが訪れ、ワークショップやシンポジウムなどでアートに触れながら多様性への理解を深めていました。

画家のカミジョウミカさんと絵を描くワークショップには親子4組が参加し、カミジョウさんが描いたモチーフに自由な発想で絵を描き足し、色を塗って作品を完成させました。丁寧に色を塗って作品を仕上げた有清美柚さん(9・穂高有明)は「本当の世界にはいないものや目に見えないものを絵に描いた。頭の中で想像したものが描けて楽しい」と声を弾ませていました。



魅力あふれる活動が集合 広がる輪

9月28日 あづみの市民活動フェスタ2025



市民団体の活動を紹介するイベントがANCアリーナ多目的ひろばで開かれました。当日は秋晴れの空の下、43団体がステージやブース出展で日頃の取り組みを発表。家族連れなど多くの人が訪れ、和太鼓の発表に見入ったり、小物作りやニュースポーツを体験したりして過ごしました。また、出展者がお互いのブースを行き来し交流する姿も見られました。

草木染めのハンドメイド雑貨を販売するブースを出展した村井華子さん(穂高)は「さまざまな活動をする人と交流できて、思いやこだわりを知ることができた」と充実した時間を過ごしていました。

